

2016. 9.15

こんにちはわ〜るど

No.59

半田国際交流協会だより

7月31日

七夕交流会を開催しました

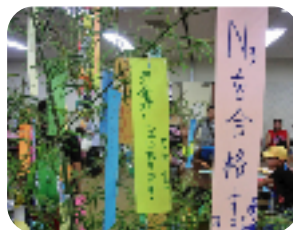
在住外国人との交流イベント『七夕交流会』を、雁宿ホール視聴覚室にて開催しました。11か国の外国人102名と、日本人95名の計197名が参加し、それぞれ短冊に願いを書いたあとは、縁日体験や盆踊りなど、日本の夏をみんなで楽しみました。



▲短冊に願いを込めて



▲水風船、釣れたかな



▲願いが叶うといいね☆



▲お抹茶体験



▲回れ、ぶんぶんごま!



▲割り箸鉄ぼう作り



▲輪投げで景品ゲット!



▲けん玉に挑戦



▲ひも引き、どれを引こうかな



▲「たなばたさま」をみんなで合唱♪



▲意外と簡単、盆踊り♪



▲全員集合〜☆

横川小学校から七夕交流会に参加してくれました！



横川小学校の児童、保護者40名ほどとともに七夕交流会に初めて参加させていただきました。子どもたちは、けん玉やだるま落としなどの日本の遊びを楽しみ、そうめんやちらし寿司を味わい、最後は盆踊りで様々な国の大人の人たちと交流することができました。このような会に参加させていただいた半田国際交流協会の皆様に感謝するとともに、今後も様々な機会を通して交流を深めさせていただければと思います。ありがとうございました。

横川小学校 校長 鈴川 慶光



僕はけん玉大会をやって金メダルをもらいました。嬉しかったです。

3年 カリノ ケシ(フィリピン)



けん玉大会で優勝しました。嬉しかったです。お父さんとお母さんも喜んでいました。

5年 カリノ カシ(フィリピン)



私は、輪投げをしました。輪投げで一点も取れませんでした。でも、お兄ちゃんが二点取ったので嬉しかったです。

5年 盛田 ひとみ(フィリピン)

私は七夕交流会へ行きました。そこでは、日本独自の文化に触れたり、日本のご飯を食べたりしました。とても楽しかったです。

6年 川野 アンナ(ブラジル)



Midlandへ3人の高校生を派遣

姉妹都市である、アメリカ ミシガン州ミッドランド市とは、1981年の姉妹都市提携の翌年から、隔年で相互に交換生を派遣しあう交換生派遣事業を行っています。今年は、7月22日～8月12日までの3週間、3名の高校生を派遣しました。感想をご紹介します。



「人の温もりにふれて」

アメリカはずっと僕の憧れの国でした。しかし、そこは果てしなく遠い世界でした。いつかそこへ行くため英語を必死に勉強していました。

7月22日にホストファミリーの方々とミシガン州サギノー空港で出会いました。彼らは僕達をウエルカムボードと素敵な笑顔で大歓迎してくれました。その時から「人の温もり」について考えさせられました。

1週目は、ブラガンカ・ファミリーの一員になりました。彼らには現地での生活に必要な知識を教えていただき、その中で礼儀や宗教行事など日本との共通点や違いも見つけました。また、ミッドラン市議会でスピーチをする機会があり、法被を着て来年10月に開催される山車祭りのPRをしたり、半田市の魅力を語りました。ドンカー市長が4年前に半田市を訪問した際の思いを振り返り、半田市の文化は素敵で美しいところだと話していたことが、とても誇らしく嬉しかったです。

2週目はグラスマン・ファミリーの一員になりました。彼らにキリスト教の教会に連れて行ってもらい、一緒に歌を歌ったり、神について考えたことが強く印象に残っています。また、その家族には小学生の男の子と女の子がいて毎日キャッチボールやゲームをして遊びました。遊びは日本と共通していると感じました。

3週目はウィット・ファミリーの一員になりました。彼らは僕にメジャーリーグ観戦をさせてくれました。それは僕の夢だったので本当に幸せな時間でした。ホストファミリーの両親が「あなたが喜んでいることが私達にとって何よりも幸せだよ」と言ってくれたことが忘れられません。

僕は、これまで姉妹都市と35年間交流を深め、バトンを繋いできてくれた全ての方々に感謝しています。そして僕なりにそのバトンをしっかりと握ったまま3週間で過ごせることが出来たのではないかと思います。これからも両市が素晴らしい関係を築き続けるための架け橋になっていきたいです。

半田高校 2年 新美 友基



「伝わる英語を学ぶ」

アメリカに来てまず初めに印象に残ったことは、現地の方々のはっきりとした自己表示です。アイス屋さんで試食スプーンをもらったとき、おいしかったけれど別の物にしたいと、ニコニコ笑ってスプーンを返したら、その味がでてきてしまいました。私たちは「はい」か「いいえ」を決めることなくうやむやにしたり、断りたいときにやんわりと伝えたりすることが多いと思いますが、自分の伝えたいことは何なのかしっかり考えながら話さなくてはいけないのだと気づかされました。

私が特に好きな場所はスーパーマーケットでした。日本ではあまり目にすることがない野菜やフルーツ、大きなサイズのお肉や調味料、カラフルなお菓子は見るだけでわくわくしました。ホストファミリーに、これはどんな食べ物なのか質問したり、私が日本の食事について話したり、見て学ぶだけでなく会話も弾む楽しいひと時となりました。

自分の英語に関しては自信がなく、伝わるかどうかとても不安でした。実際に生の英語を聞いて、わかる部分から推測することが大切だと感じました。また、話すときは無理に難しい文法を使おうとせず、一文を二文に分けたり、主となる単語を強調したりするようにしました。伝えたいという気持ちを前面に押し出して話すと理解されやすかったです。「正しい英語」ではないけれど「伝わる英語」を学ぶことができたと感じています。

一つ一つの出来事が楽しく、普通の海外旅行ではできない日常生活を体験することができ、忘れられない貴重な経験となりました。

明和高校 2年 吉岡 美咲



「異文化を知った3週間」

アメリカでの生活は、すべてが新鮮で驚きの連続でした。巨大なモールやまっすぐに伸びるハイウェイは、何度見ても映画の中のような感じでしたし、朝ご飯からワッフル、メロンを食べたり、はじめての地下室で夜を過ごしたり、場所が違えば、文化はこんなにも違うものかと、とても感じました。一方で、テレビ番組の同じところで笑えたり、国は違っても人は一緒だ、と思えることも多くありました。

ミッドランドは、ダウントウンには街灯ごとに花が吊り下げられ、トリッジという三つ叉の橋や、その前にある広場で週末に開かれる賑やかなファーマーズマーケットなど、綺麗で活気があり、住む人が心から楽しんでいる街でした。また、リスや鹿がいたり、家の中まで木々の揺れる音がしていたりと、本当に綺麗な自然が残っていました。

滞在中、日本の文化を伝えようと、手ぬぐいやふろしきをプレゼントしたり、お好み焼きやいなり寿司を作ったりしました。アメリカの人たちは思っていたより日本のことを知りませんでしたが、思っていたよりずっと不思議に思ったり、興味を持ったりしてくれました。

一番心に残っているのは、マッキナック島という島に行った時のことです。島へ向かう船の上から見たどこまでも続く湖は、日本にいたらわからない地球の大きさを感じました。島には馬車と自転車だけが走り、白い家が立ち並ぶ町並みはとても綺麗で、島にいる間は夢の中にいるようでした。将来また来たい、とホストファミリーに話すと、新しい夢が一つできたね、と言われました。

この滞在で、アメリカという国やミッドランドという街が本当に好きになったのと同時に、日本という国、半田という街も好きになりました。違う文化を知ることで、自分の故郷も愛することができるのかなと思い、その意味でも、今回の3週間は自分にとって一生の宝物になったと思います。

半田高校 2年 金井 遼介



日・ブータン外交関係樹立30周年記念事業

ブータン王国訪問



2005年の愛・地球博で、フレンドシップ相手国となったブータン王国との交流は、2008年に発足した半田ブータン青少年交流協会が活動を進めています。今年は、8月20日～28日の9日間、学生3名、大人10名の計13名が幸福の国ブータンを訪れました。参加者の感想をご紹介します。

▷ 学生3名はホームステイや通学など、ブータンの生活を体験しました！



「家族の絆」

私にとってブータンは、初めて国際交流を経験した国です。私が幼稚園のころ、愛・地球博のナショナルデーのイベントで、ブータンの方々から伝統の踊りを教えていただいたり、一緒に食事をする機会がありました。その際に、ブータンの方々がとても親身に接してくださり、「ブータンの人ってこんなに優しいんだ。いつか自分もブータンに行ってみたいな」と思うようになりました。その夢が実現して、本当に嬉しかったです。

今回のホームステイを通して感じたことは、ブータンは家族の絆がとても深いということです。私がホームステイしたお宅では、食事は必ず家族揃って食べていました。食事中や車の中でも、1日の出来事など、家族の会話が弾んでいて、とても楽しそうでした。また、家族写真の数が私の家と比べて倍近くあり、写真はどれも笑顔で、家族の仲の良さがうかがえました。そんなホストファミリーからもらった、私とホストファミリーの写真は、宝物です。

私は最近、親や兄に対して素直になれず、反抗してしまうことが多くあります。ですが、このホームステイを通して、家族の絆を深めていくことはとても素敵なことだな、と改めて感じました。なので、いつかまたブータンに行くときは、必ず家族全員で行きたいなと思っています。

半田東高校 2年 稲生 陽子



▲ホストファミリーと



▲最終日、学生を代表して、英語でスピーチしました。

「貴重な体験」

はじめての海外、はじめてのホームステイで不安や緊張が沢山ありました。ホストファミリーの方はどういう人なのかなとか、学校は大丈夫かなとか、食べる物は大丈夫かなとか、自分の思っていることをちゃんと英語で言えるのかなとかいろいろ思っていました。でも、ホストファミリーと会い、家についたら私をすごく歓迎してくれたら、ウェルカムパーティーのときには家族とも少しなじめて、ホームステイへの不安や緊張はなくなりました。

学校ではいろんな子からいろいろ聞かれてとまどったときもあったけど、それは一日目だけで、二日目、三日目は学校が楽しくなりました。それに、同じクラスの子たちが日本語を調べてきてくれて話したり、手紙をくれたりとすごく嬉しく思いました。学校も日本の学校とは違うところがありました。校舎が何個もあったり、トイレが校舎からはなれていたり、朝礼で国旗をあげて歌をうたったり、ピアスをみんなあけていたり、ビックリすることがたくさんありました。でもそれは、ブータンの学校の風景なんだろうなと感じました。

学校の後には織物博物館や寺院に行ったりしてブータンのことがよく分かりました。ホストファミリーの方々にも夜、首都ティンブー全体が見える所までつれて行ってもらったり、色々なお店に行ってお飯やケーキを食べたり、お父さんや、お姉さんたちの仕事場につれていってもらったりと、すごく家族の方に親切にしてもらいました。

中学生のうちからこんな貴重な体験ができるなんてめったにないので、ブータンに行けてすごく良かったなと思いました。

乙川中学校 2年 石川 文音



▲ウェルカムパーティ



▲3人で「となりのトトロ」を披露しました。



「優しくったブータンの人々」

私は今回の体験ですごく印象的なことがありました。それは、「ブータンの人々の優しさ」です。本当に感動するほどに優しく、こんな人もいたんだ、と思ったくらいでした。

なぜ、私がこんなに感動したか。その理由は多々ありますが、少しでも紹介します。一つは、私が初めてホストファミリーの家に行った時です。日本から約13時間かけて到着し、正直疲れていたのですが、初めて会うのに疲れたから寝ると言えずにいました。そうしたら、ホストマザーが、「疲れているでしょ、私たちに遠慮せず寝て下さい。」と言ってくれました。英語だったので本当にこう言っているのか分からなかったのですが、ホストファザーが日本語が少し分かる方で訳してくれました。それを聞いて優しい人なんだと思いました。それだけではなく表情もまた、柔らかい笑顔でした。とてもうれしかったです。

そして、もう一つ。これは本当に信じられないと思いました。車で道を走っていると、牛や馬などが普通に道を横断していて、それを車が待っていたのです。クラクションもならさず、いらいらもせずに、笑顔で。本当に素晴らしいと思いました。私なら絶対いらいらしてしまいます。

こんな感じでブータンの人は心が広く、とても優しいと思いました。世界中がブータンみたいだったらきっと幸せがいっぱいになるとも思いました。

成岩中学校2年 小田 早夏



▲ホストファミリーと

▷市民訪問団10名は、内務大臣・教育省長官の表敬訪問、学校・病院の視察、観光などを行いました！



半田ロータリークラブの3名は、シュムガン県
ゴレン村に行き、害獣避けの太陽光電気柵
設置プロジェクトを実施しました。



唐辛子とチーズの
煮込み「エマダツィ」。
ブータンでは唐辛子を
野菜として食べます。



民族衣装「キラ」を
着せてもらいました。



標高約3000mの
山肌に建てられた
タクツァン僧院。



首都ティンブーの交差点では
混雑時のみ警官が手信号で
交通整理をしています。



くつろいでいる犬。

「ゆったりとしたブータンの時間」

ブータンを訪れた第一印象は、「静か」でした。入り乱れた交通、鳴りやまないクラクション、雑踏といった、発展途上国で見かけるカオスな光景はありません。伝統建築の建物、民族衣装を着た人、あちこちに飾られた王様の大きな写真。まるで映画の撮影所に来たような感覚になります。ブータンに信号機はありませんが、交差点はラウンドアバウトに整備されており、渋滞しがちな市内の車はルールを守っています。

殺生をタブーとするブータンでは、野犬がたくさんいますが、いじめられることがないからか、あちこちで寝ています。かといってふてぶてしさはなく、がつつもしておらず、景色の一部になっています。ブータンは動物もゆったりしている、と感じました。

ブータンの人は、王室の細かい家系図が頭に入っており、観光中は「前国王の〇番目の王妃が建てた施設で…」「この一帯は国王のおばあさんの敷地で…」という説明をよく聞きました。また、民族衣装「キラ」を着せていただいた時は、王様の写真のバッジを、最後の仕上げに付けてくれました。王様バッジは、道行く人や、ブータンエアラインズの客室乗務員の人も付けているのを見ました。

ブータンを訪れてみて、「幸せの国」だったかと問われたらどう答えていいかわかりませんが、日本と比べたり、当てはめたりすることはあまり意味がないように感じます。実際見てきたことは、日常生活に根付いているチベット仏教への信仰心と、王様への忠誠心です。それが、穏やかで優しいブータン人の誇りとなっており、そうしたアイデンティティこそが、幸せにつながっているのだろう、と思いました。

半田国際交流協会 稲生 尚子



ポジャギ作家との出会い

今年5月、ソウルで開催されたロータリークラブ国際大会に参加したときの、会議の合間の出来事。開会式に参加し、バスでソウル市内のホテルに到着したのは午後3時半。次の予定は午後7時からの夕食会なので、3時間半の空き時間ができた。「ようし！」冒険心がムラツときた。6年前に購入したガイドブックを片手にタクシーに乗り込んだ。運転手の安さんは、日本語も流暢に話す。何度か韓国は訪れる機会があったが、気にはなっているも行けなかったところに、どうしても行きたいと安さんに告げると、車は北村(ブッチョン)に向け走行していた。

北村は李朝時代の貴族階級の住宅街が残っている。山の斜面に建てられた街並みは瓦屋根が連なっている。通りすがりの観光客にシャッターを頼み記念撮影。タイミングよく安さんが迎えに来てくれた。時計を見ると午後4時、「まだいける!!」すかさずガイドブックを差し出し、次の目的地を告げた。スタジオ“布(ポー)”へと。

ガイドブックによるとパク・テヒョンさんがアトリエでポジャギの教室を開いていると記されている。ナビで検索し向かうが、見つからない。安さんも車から降りて聞き込み。住宅街のお店に入って聞くと、すぐ近くだといって連れて行ってくれた。建物の前まで行き、意を決してインターホンを押す。安さんに韓国語で訪問した意図を告げてもらい、返ってきた答えが「どうぞお入りください」と、日本語だったのでびっくりした。ガイドブックに掲載されていたパクさんの作品に感銘を受け、お邪魔させていただいたことを改めて告げるが、「今は、もう作品は作ってないの」と言いながら、掲載されていた作品を数点、持ち出してくれた。

「物を包み、人の気持ちを包む。人への敬意やつながりを大切にする韓国の美しい精神を布に託して昇華させたのがポジャギの文化」と紹介された。

作品を前にして、自家製の五味子茶(オミジャチャ)をいただきながら、パクさんとするお話は、初めてお会いした人とは思えないぐらいに話が弾み、充実した時間を過ごすことができた。しっかりとお礼を言い、お宅を後にした。

『人との出会いが、人生を豊かにしてくれる』そんな旅だった。

半田国際交流協会 副会長 榊原 肇



▲パクさん(中)と筆者(左)



▲伝統家屋が並ぶ北村



ホームページアドレス <http://www.handakokusai.aichi.jp>

半田国際交流協会

検索

半田国際交流協会にご入会ください!

会員募集

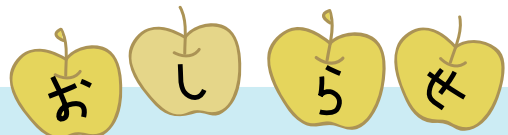
年会費	個人会員	2,000円
	団体会員	10,000円
	法人会員(1口 5,000円)	
	・従業員数 1名～29名	1口以上
	・従業員数 30名～49名	2口以上
	・従業員数 50名～	4口以上

申込先: 半田国際交流協会(雁宿ホール内1階)

TEL: 0569-26-1929 FAX: 0569-26-1992

E-mail: hia@poplar.ocn.ne.jp

HP: <http://www.handakokusai.aichi.jp>



—今後の予定—

■10月30日(日)

こんにちわーどフェスティバル
～世界の人たちとあそぼう!～

時間 10:00～15:00 場所 半田赤レンガ建物

楽しいパフォーマンスや催しがたくさん!
みんな遊びに来てね!

■11月20日(日)

日本語学習生対象 「日本文化視察」研修旅行

今年は京都へ行きます。

